# 神話や伝説に見られる蛇と女の死

佐佐木　隆

## 一

一般に三輪山伝説と呼ばれているものには、周知のように三話ある。それらのうち、三輪山の神である大物主神が、もとの蛇体から赤い矢に変身して溝を流れ下り、気に入った女に近づいてその陰部を突いた、という話は「丹塗矢伝説」と呼ばれている。『古事記』の神武天皇の条に見えるこの伝説の成立その他の諸点について、かつて細かく分析を加えたことがある。[注1]

本稿では、同じく三輪山の大物主神が登場する伝説を二つ取り上げ、話の展開のありかたその他について、さまざまな角度から考えてみたい。二話のどちらも『日本書紀』に見えるものであり、人が神の姿を見たいと願ったという、共通の話題で始まる伝説である。一方の伝説は同書の崇神天皇の条に見え、他方の話は雄略天皇の条に見える。

「崇神紀」に見える話の中核は、ほぼ次のようなものである。大物主神の妻になった倭迹迹日百襲姫命が、夜にだけ自分のもとに来る夫に対して、「その尊い姿をはっきり見たいと思います。朝までここにいて下さい」と言った。夫は妻の願いを聞き入れることを約束し、同時に「私の姿に驚いてはいけない」と妻に言った。しかし、翌朝に小蛇の姿になった夫を見て、妻は驚いて叫び声を上げた。それに恥じた夫は、すぐに人の姿に変身し、怒りのことばを残して御諸山に帰って行った。夫が課した禁を破った妻は自分の行為を悔い、その場にすとんと腰を下ろした。すると、そこにあった箸が陰部に突き刺さり、妻はそのまま死んでしまったという。「箸墓伝説」と呼ばれる話である。[注2]

もう一方の「雄略紀」に見える話は、少子部連蜾蠃という人物に関する伝説である。御諸岳の神、つまり大物主神の姿を見たいと思った雄略天皇は、腕力の強い少子部連蜾蠃に「御諸岳の神の姿を見たい。行って神を捉えて来い」と命じた。蜾蠃はそれに応えて大蛇を捉えて来たが、天皇は神が示した霊威を恐れ、その姿を見ようとせずに殿の中に隠れてしまった。そ

して、結局は大蛇をもとの御諸岳に放させたという。数話ある「少子部伝説」の一つである。

まず、二話の訓読文をあげる[注3]【Aの伝説の末尾には「時の人」が詠んだという歌が載っているが、長くなるので引用は割愛する】。

A　是の後に、倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻と為る。然れども、其の神、常に昼は見えずして、夜のみ来す。倭迹迹姫命、夫に語りて曰く、「君、常に昼は見えたまはねば、分明に其の尊顔を視ること得ず。願はくは、暫し留りたまへ。明旦に、仰ぎて美麗しき威儀を覲たてまつらむと欲ふ」といふ。大神、対へて曰く、「言理灼然なり。吾、明旦に汝が櫛笥に入りて居らむ。願はくは、吾が形にな驚きましそ」とのたまふ。爰に、倭迹迹姫命、心の裏に密に異ぶ。明くるを待ちて櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ太さ、衣紐の如し。則ち驚き叫啼ぶ。時に、大神、恥ぢて、忽に人の形と化りたまふ。其の妻に謂りて曰く、「汝、忍びずして吾に羞せつ。吾、還りて汝に羞せむ」とのたまふ。仍りて、大虚を践みて、御諸山に登ります。爰に、倭迹迹姫命、仰ぎ見て、悔いて急き居。則ち箸に陰を撞きて薨りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故、時の人、其の墓を號けて、箸墓と謂ふ。是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。　〔崇神紀〕

B　天皇、少子部連蜾蠃に詔して曰はく、「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。或いは云はく、此の山の神をば大物主神と為ふといふ。或いは云はく、菟田の墨坂神なりといふ。汝、膂力人に過ぎたり。自ら行きて捉へて来」とのたまふ。蜾蠃、答へて曰さく、「試に往りて捉へむ」とまをす。乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉へて、天皇に示せ奉る。天皇、斎戒したまはず。その雷、虺虺きて、目精赫く。天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。仍りて、改めて名を賜ひて雷とす。　〔雄略紀〕

二話のうちBの伝説には、天皇が姿を見たいと願った神について、「或いは云はく、此の山の神をば大物主神と為ふといふ。或いは云はく、菟田の墨坂神なりといふ」という注記が付されている。そのことが主な理由だろうと思われるが、Bの伝説は三輪山伝説の一つだと一般には認められていない。しかし、本稿の筆者は、その内容・構成から見てこれも三輪山伝説と認めて問題はない、と考える。

Bの伝説とAの伝説とについてその具体的な内容・構成を分析してみると、二話は次のような対応関係を示す。

| A | B |
|---|---|
| 1　神と女が結婚する | 1　- - - - - - - - - - |
| 2　女が神の姿を見たいと願う | 2　天皇が神の姿を見たいと願う |
| 3　小蛇の姿をした神が姿 | 3　大蛇の姿をした神が姿 |

| | |
|---|---|
| を現す（女が見て、驚き叫ぶ） | を現す（天皇が目を覆い、見ようとしない） |
| 4　女の行為に怒った神が猛威を示す | 4　天皇の行為に怒った神が猛威を示す |
| 5　神が三輪山に戻る | 5　神を三輪山に戻す |
| 6　女が箸で陰部を衝いて死ぬ | 6　- - - - - - - - - - - - |
| 7　神と人が交替で墓を作る | 7　- - - - - - - - - - - - |

Aの伝説の冒頭部分と末尾部分に対応する内容が、分量的にAの伝説の半分ぐらいしかないBの伝説には、まったく含まれていない。しかし、Bの伝説の中核的な内容は、それぞれの項目が出現する順序も含めて、Aの伝説によく対応している。二話の間に系譜的なつながり、あるいは何らかの影響関係のあったことが、右のような対応関係から見て想定できる。

## 二

A・Bの二話に見られる対応関係は、右のような分析で十分に明らかである。しかし、もっと具体的な内容・構成の面から二話に分析を加えれば、両者の関係がさらに密接なものであることが明らかになる。その分析とは、二話を成り立たせている実際の表現を対照しながら確認していく、ということである。

話の流れに従って、全体を1～9の九項に分けて見てみる。まず、神の姿を見たいという願望を人が表明する表現は、当然のことながら互いによく似たものになっている。

1A「明旦に、仰ぎて美麗しき威儀を覩たてまつらむと欲ふ」
B「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ」

これらの文はどちらも単独では現れておらず、次のような命令文を伴なっている。

2A「願はくは、暫し留りたまへ」
B「自ら行きて捉へて来」

そして、神の姿を見たいとの願望を実現すべく行動しようという意志も、次のようによく似たかたちで表明される。

3A「吾、明旦に汝が櫛笥に入りて居らむ」
B「試に往りて捉へむ」

続いて、神が実際にその姿を現す場面になるわけだが、神は一方では「小蛇」として現れ、他方では「大蛇」として現れる。

4A「明くるを待ちて櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り」
B「大蛇を捉へて、天皇に示せ奉る」

この4の項には、語りのありかたを考えるうえで注意すべきことが含まれている。それは、神である小蛇が、櫛笥つまり櫛その他の装飾品を入れる箱のなかに入っていたという、Aの伝説に見える説明である。櫛笥という入れ物は、女性の持ち物として上代の歌にも散文にもよく出てくる。だから、妻の櫛笥のなかに、夫である小蛇が入っていたというのは、夫婦の間の親密さを端的に示すものにほかならない。[注4] しかし、そのことと、すぐあとに夫婦が決定的な離別を迎えることとは状況の落差があまりにも大きく、また話の展開をひどく急なものにもしている。その落差の大きさと話の急展開とは、話の語り手が明確に意識して設定したものに違いない。

さて、蛇体の神が姿を現した時に、神に対して人がとった無礼な行動は、

5A「則ち驚き叫啼ぶ」
B「天皇、斎戒したまはず」

と説明されている。Aの伝説では、神が課した「願はくは、吾が形にな驚きましそ」という禁を破り、人が驚きの声を上げた。また、Bの伝説では、神にまみえる前には斎戒沐浴しなければならないのに、人がそれを行わなかった。どちらも、神に対する冒瀆である。

そのような冒瀆に対して、神は怒りのことばを発し、また怒りの表情をあらわにする。

6A「汝、忍びずして吾に羞せつ。吾、還りて汝に羞せむ」
B「その雷、虺虺きて、目精赫く」

ここで神が発した怒りのことばは理解しやすいが、Bの伝説の「虺虺きて」は意味がわかりにくい。「虺虺」は雷鳴を表す漢語であり、それに付された「ひかりひろめく」という訓の「ひろめく」は、古写本に「ひらめく」ともある。どちらの訓も、「ひらひら動く」という雷光の様子を表す動詞である。だから、漢語のもとの意味とそれに付された訓との間に、かなりの開きがある。

「虺虺」に続く「目精赫く」は、「目をぎらぎらさせる」「赤く光らせる」などの意の表現である。蛇神でも雷神でもある大物主神ゆえの、恐るべき霊威を表す光景である。

神の怒りを受けたあとで、人がとった一方の行動は自分のしたことを悔いてのそれであり、他方の行動は神を恐れてのそれである。また、一方の人は、小蛇となった神の姿や御諸山へ帰って行く神の姿を仰ぎ見たのに対し、他方の人は大蛇である神を見ようとはせず、目を覆って殿の中に隠れた。

7A「倭迹迹姫命、仰ぎ見て、悔いて急き居。則ち箸に陰を撞きて薨りましぬ」
B「天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、

殿中に却入れたまひぬ」

こうして、二人は結局その場を去ってしまった。一方は他界へ赴き、他方は殿の中に姿を消した。そして、

8A「大虚を践みて、御諸山に登ります」
　B「岳に放たしめたまふ」

という表現で、どちらも神が自分の本拠地である三輪山へ帰ったことが述べられる。この8の項で、Aの伝説に「大虚を践みて…」とあるのは、右でも述べたように、蛇神が同時に雷神でもあるという、大物主神の行動を描写したものである。『萬葉集』に「天雲をほろに踏みあだし鳴る神も、今日にまさりて恐けめやも」〔十九・四二三五〕とあるように、雷鳴は天空で神が雲を踏みつける音だと考えたのである。倭迹迹姫命は、その大物主神の様子を、地上にいて「仰ぎ見」るしかなかった。

最後に置かれているのは、申し合わせたかのように、場所・人に対する名付けの話である。

9A「時の人、其の墓を號けて、箸墓と謂ふ」
　B「改めて名を賜ひて雷とす」

このように、A・Bの両伝説がもつ内容・構成・表現は、1〜9の諸項が継起する順序も含めて互いに酷似したものになっている。やはり、両伝説は同じ話をもとにして作られたか、一方を下敷きにして他方が作られたか、のどちらかだろう【おそらく、Bの伝説のタイプが古くて、Aの伝説のタイプがより新しいものだろう。Aの伝説の内容には、知的な操作が重層的に加えられている】。

Aの伝説には、9の項のあとに「是の墓は、日は人作り、夜は神作る」という記述が見える。これは、同伝説の冒頭に「其の神、常に昼は見えずして、夜のみ来す」とあることに、内容的に対応している。冒頭の説明に末尾の説明を照応させる、というかたちである。神は昼にはほとんど行動せずに夜に活動する、という考えを反映する記述である。[注5]

冒頭の説明に末尾の説明を照応させるのに近いことが、大物主神と倭迹迹姫命との関係に認められる。言うまでもなく、神と人とはもともと別の領域に住む存在であり、結婚が破綻して両者が離別してしまうことは、「是の墓は、日は人作り、夜は神作る」という末尾の記述に照応している、と解することができる。あるいは、この末尾の記述は、神と人との結婚が破綻することを語るという、Aの伝説の内容を象徴するものだ、と解することもできる。

大物主神が倭迹迹姫命に課した、「願はくは、吾が形にな驚きましそ」という禁について考えてみなければならない。黄泉国神話で伊邪那美命が伊邪那岐命に課した「我をな視たまひそ」という禁や、豊玉毘売命が火遠理命に課した「願はくは、妾をな見たまひそ」という禁などから判断して、大物主神の「な驚きましそ」という発言は、よくある「見るなのタブー」

を臨時に変形したものに違いない。そのように解すべき根拠は、夫の姿を見たいという倭迹迹姫命の要求に対して、大物主神がそれを素直に受け容れ、翌朝に自分の姿を妻に見せると約束した、ということである。このような文脈では「見るなのタブー」がもともと成立しないから、それを少しだけ変形して、見た時に「驚く」ことを禁じたのである。

「見るなのタブー」は身体・姿を見ることに関して課す、というのが一般的である。大物主神の課した禁が「見る」ことから「驚く」ことへと変形されてはいても、「願はくは、吾が形にな驚きましそ」という発言に明らかなように、それが身体・姿に関する禁のままになっている点にも注意しなければならない。

Aの伝説の大物主神と倭迹迹姫命との間には、およそ次のような対応項が確認できる。

i　神　／　人
ii　夫　／　妻
iii　応える　／　願う
iv　禁を課す　／　禁を破る
v　恥じる　／　悔いる
vi　足で踏みつける　／　尻餅を突く
vii　天空　／　地上
viii　もとの地に戻る　／　他界へ赴く

これは、大物主神と倭迹迹姫命が対比的な関係にあることを、語り手が常に意識して構成した話であることを示すものである。Bの伝説にはこのような関係はほとんど見られず、内容的に単純で素朴な話だとの印象を受ける。

## 三

周知のように、蛇・蛇神とイメージのうえで重なる刀剣には、恐るべき霊威が具わっている、と考えられた。そのことを物語る伝説がある。

C　古老のいへらく、「石村の玉穂の宮に大八洲駅しめしし天皇のみ世、人あり。箭括の氏の麻多智、郡より西の谷の葦原を截ひ、墾闢きて新に田に治りき。此の時、夜刀の神、相群れ引率て、悉盡に到来たり。左右に防障へて、耕佃らしむることなし。俗いはく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。其の形は、蛇の身にして頭に角あり。率引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず。凡て、此の郡の側に郊原に尽多に住めり。是に、麻多智、大きに怒の情を起こし、甲鎧を着被けて自身杖を執り、打殺し駈逐らひき。

（略）　〔常陸国風土記行方郡〕

D　昔、近江の天皇のみ世、丸部の具といふもののありき。是は仲川の里人なり。此の人、河内の国兔寸の村の人の賣た

る劔を買ひ取りき。劔を得てより以後、家挙りて滅び亡せき。然して後、苦編部の犬猪、彼の地の墟を圃するに、土の中に此の劔を得たり。土と相去ること、廻り一尺ばかりなり。其の柄は朽ち失せけれど、其の刃は渋びず、光、明らけき鏡の如し。ここに、犬猪、即ち心に怪しと懐ひ、劔を取りて家に帰り、仍ち鍛人を招びて、其の刃を焼かしめき。その時、此の劔、申屈して蛇の如し。鍛人、大きに驚き、営らずして止みぬ。ここに、犬猪、異しき劔と以為ひて、朝庭に献りき。後、浄御原の朝庭の甲申の年の七月、曾祢連磨を遣りて、本つ処に返し送らしめき。今に、此の里の御宅に安置けり。

〔播磨国風土記讃容郡〕

Cの伝説では、蛇神について「率引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず」と説明している。「家族を引き連れて蛇の難から逃れようとする時に、蛇神の姿を見る者がいれば、一族が滅亡して子孫が絶える」ということだが、この話には「箭括の氏の麻多智」が蛇神を「打殺し駈逐ら」ったとある【「箭括」は説話的な意味を担うもので、『萬葉集』に「ちはやぶる神を言向け、服従はぬ人をも夜波之…」〔二十・四四六五〕その他の例があるように、「討ち平らげる」「従わせる」などの意の「やはす」から連想されたものだろう。また、「麻多智」は「真断ち」あるいはそれと同語源の「真太刀」の意だろう。「太刀」は「断ち」に由来する】。

Dの伝説には、「丸部の具」が劔を買い取ったあとで一家の者がみな滅亡した、とある。また、同話には、土の中にあった劔を「苦編部の犬猪」が見つけ、それを焼いて鍛冶させようとしたところ、劔は「申屈して蛇の如」く動いた、ともある。イメージのうえで蛇と刀剣とが重なるものだったことは、須佐之男命が大蛇の尻尾を割いて草薙剣を取り出した、という神話から明らかだが、Dの伝説にもそれが明瞭に表れている。須佐之男命が「この大刀を取りて、異しき物と思ほして、天照大御神に白し上げたまひき」と『古事記』にあるのと同様に、Dの伝説にも「犬猪、異しき劔と以為ひて、朝庭に献りき」とある【「丸部の具」という名の「丸」は、『古事記』の歌謡に「丸邇坂（和邇佐）の土を…」〔四二〕とあるように、「丸」が土の産地だったことに因むものだろう。そして、それは、あとに「土と相去ること、廻り一尺ばかりなり」と出ていることと、イメージのうえでつながっているのだろう。「苦編部犬猪」の「犬猪」は、土を掘ってものを探し出すことに由来するのだろう】。

人から劔を買い取った者の一家がすっかり滅亡してしまった、とDの伝説にあるのは、蛇神について「見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず」とあるCの伝説の記述と共通する点があって、まことに興味深い話である。ともに、蛇・刀剣に具わる霊威は恐るべきものだと考えられたことを反映する。

これらの伝説とは別に、蛇類の出す毒気にやられて多くの人が死んだという話もある。その代表的なものが、「虬」と呼ばれる蛇類に関する伝説である。漢字としての「虬」は、「虯」の俗字である。「蛇」そのものではなく「龍」の類であり、これを「有角曰虬」と解説する古字書もある。「みつち」という

呼称は、「水つ霊／巳つ霊」に由来すると解されている【「つ」は「の」にあたる助詞である】。

この蛇類に関する伝説が、「仁徳紀」六十七年の条に見える。

E　是歳、吉備の中国の川嶋河の派に、大虬有りて人を苦しびしむ。時に路人、其の処に触れて行けば、必ず其の毒を被りて、多に死亡ぬ。是に、笠臣の祖縣守、為人勇捍しくして強力し。派淵に臨みて、三の全瓠を以て水に投れて曰く、「汝、屢毒を吐きて、路人を苦しびしむ。余、汝虬を殺さむ。汝、是の瓠を沈めば、余避らむ。沈むること能はずは、仍ち汝が身を斬さむ」といふ。時に虬、鹿に化りて、瓠を引き入る。瓠沈まず。即ち劔を挙げて水に入りて、虬を斬る。更に虬の類黨を求む。乃ち諸の虬の族、淵の底の岫穴に満めり。悉に斬る。河の水、血に変りぬ。故、其の水を號けて、縣守の淵と曰ふ。此の時に当りて、妖気稍に動きて、叛く者一二、始めて起る。是に、天皇、…

〔仁徳紀六十七年〕

河の分岐点に虬がおり、その近くを人が通る時に、「毒を被りて、多に死亡ぬ」とある。さらには、「笠臣の祖縣守」が「虬の族」を「悉に斬」ったところ、「妖気稍に動きて」つまり、その毒気・祟りが原因で、朝廷に叛く者が始めて出てきたという。

これに似た伝説が、同じ「仁徳紀」の五十五年の条に見える。叛乱する蝦夷を討てと命じられた「田道」が、命を果たすことができないままに敗死した。その後、また蝦夷が人民を襲うとともに、田道が埋葬されている墓を掘る、という事件があった。その時に、墓のなかから大蛇が現れたという。

F　則ち大蛇有りて、目を発瞋して墓より出でて咋ふ。蝦夷、悉に蛇の毒を被りて、多に死亡ぬ。唯一二人、免るること得つらくのみ。故、時の人の云はく、「田道、既に亡にたりと雖も、遂に讎を報ゆ。何ぞ死にたる人の知無からむや」といふ。

こちらの伝説では、「虬」とはなく「大蛇／蛇」と明記されている。言うまでもなく、それは田道の霊が具体的な姿をとって現れたものである。Eの伝説と同様に、蝦夷が「蛇の毒を被りて、多に死亡」んだという。だから、Eの伝説の虬とFの伝説の蛇とについては、伝承者・編者の脳裏に大きい違いはなかったと理解してよいだろう。これらは、やはり蛇の類には人の命を奪う恐るべき霊威を象徴するものが、E・Fの両伝説に出ている「毒」である【「田道」つまり「たぢ」という人名は、蛇のまむしをさす「蝮」に由来するものだろう】。

以上のように、蛇の霊威の恐ろしさは、その姿を見る者が死ぬとか、その毒気を受ける者が死ぬとかというかたちで示されている。その相違は地域差によるものだったのかも知れない

し、同じ地域でその双方が信じられ語られていたのかも知れない。

ここで、話をさきのA・Bの両伝説に戻す。人が神の姿を見たいと願ったことを語るのは、これらの両伝説だけである。Aの伝説では倭迹迹姫命が死んでしまうのに対して、Bの伝説では雄略天皇は死なない。その相違は、蛇神について「見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず」という記述がCの伝説にあり、「劔を得てより以後、家挙りて滅び亡せき」という記述がDの伝説にあることと、深い関係があるのではないか。具体的に言えば、Aの伝説に「櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り」「倭迹迹姫命、仰ぎ見て…」とあることと、Bの伝説に「天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして…」とあることとの相違が、結果的に倭迹迹姫命が死に、雄略天皇は死なない、という相違に対応する可能性がある、ということである。

Aの伝説では、夫が課した「願はくは、吾が形にな驚きましそ」という禁を、妻が破ってしまった。そのことが妻の死という悲劇を導く原因になっているわけだが、それはあくまでも話を展開させるための設定にすぎないのではないか。つまり、Cの伝説にあるように、Aの伝説の場合も、蛇神の姿は絶対に見てはならない、それを直接に見た者は死ぬ、というような考えが話の背景にあったのではないか。[注6][注7]

三輪山伝説のうち、人が大物主神の正体を実際に見たという設定になっているのは、Aの伝説のみである。丹塗矢に変身した同神や、丹塗矢から男の姿に変身した同神と女とが関係をもつ、という「神武記」に見える「丹塗矢伝説」では、女は蛇としての姿を直接には見ていない。だから、Aの伝説で、たとえ巫女的な性格をもつ倭迹迹姫命であっても、神が人の前で蛇体を現したことを語るのは、きわめて特異なことである。蛇体の神を人が直接に見るなどということは普通あってはならない、と考えられたのではないか。

Aの伝説では倭迹迹姫命が死に、Bの話では雄略天皇が死なない、ということに対する以上の想定には、それを支える、蛇・蛇神にかかわる資料が少ない。また、蛇神について「見る人あらば家門を破滅し、子孫継がず」とあることが、どの程度の広がりをもつ俗信だったのか、ということも不明である。[注8]

## 四

Aの伝説では、箸で陰部に損傷を負った倭迹迹姫命が、そのまま死んでしまう。このほかに、何かの道具が陰部を突いたことを語る話が二つある。その一つは、本稿の冒頭及び前節で言及した「丹塗矢伝説」である。大物主神の変身した丹塗矢が溝を流れ下り、大便をしていた勢夜陀多良比売の陰部を突いた。彼女がその矢を持ち帰って床の辺に置いたところ、矢は美男に変身して彼女と結婚した。そうして生まれた子が神武天皇の大后になったという。[注8]

残るもう一つの話は、天照大御神と須佐能男命の姉弟をめぐる神話に含まれている。天照大御神が機織りをしている時に、

弟の須佐能男命が、皮を剥いだ馬を、屋根を壊して部屋の中に投げ込んだ。それに驚いた服織女が、機を織るのに用いていた「梭」で陰部を突き、損傷を負って死んだという。これは『古事記』に見える話だが、『日本書紀』には、「天照大神、驚動きたまひて、梭を以て身を傷ましむ」〔本書〕とも、「稚日女尊、乃ち驚きたまひて、機より堕ちて、持たる梭を以て體を傷らしめて、神退りましぬ」〔一書第一〕ともある。天照大神に関する「梭を以て身を傷ましむ」という説明は、陰部に損傷を負ったことを婉曲に表現したものである。死んでしまった稚日女尊は、天照大神の分身として登場させられたものと考えられる。

二話のうち、矢が陰部に突き刺さったのではなく、矢が陰部を軽く突いただけであり、その場で女が死なない「丹塗矢伝説」はともかく、天照大神や稚日女尊が梭で身体を傷つけたり死んだりする神話では、女が自身で梭を陰部に突き刺したかたちになっている。Aの伝説の倭迹迹姫命もまた、ほかの誰かによって箸を陰部に突き刺されたのではなく、倭迹迹姫命が自分の行為を悔やんで急に腰を下ろした時に、そこにあった箸が陰部に突き刺さってしまった。天照大神や稚日女尊も倭迹迹姫命も、自分の動きが原因となって陰部に道具が突き刺さったのである。つきつめて言えば、直接の死因は女自身の不適切な動き、つまり自己の過失である。

しかし、崇神天皇の「姑」であり、巫女的な性格の強い倭迹迹姫命や、世界の至高神である天照大神・稚日女尊が、自己の過失によって死に至ったとまともに語るのは、当時の人々の考えかたとしては適切ではない。なぜなら、そのことが、彼女らのもつ神聖性・威厳を少なからず削ぐことになるからである。

そこで持ち出されたのが、怒った大物主神が倭迹迹姫命と別れて御諸山に帰って行くという想定外の事態や、皮を剥がれた馬が上から落ちて来るという突発的な事態である。これらの重大な事態や衝撃的な事態が生じれば、とっさに彼女らがとった行動はやむをえないものだということになる。つまり、偶発的な事件が起こった時の行動だということで、彼女らの神聖性・威厳はある程度まで保たれるのである。そのような意味で、女が陰部を突くという事態が生じる前に偶発的な出来事が起こったと設定することは、それぞれの話を語るうえでぜひとも必要だったのである【こうした点から、女の地位・身分が高ければ高いほど、その偶発的な出来事は意外性の大きいものでなければならなかった、と想定することも可能なのではないか】。

さて、ここで少し視点を変えて、神あるいはそれに近い女が陰部に損傷を負う、という内容をもつ話について考えてみる。「丹塗矢伝説」では、矢が陰部を突くだけであり、そこに損傷を負うわけではないから、この伝説は除外する。代わりに、火神を産んだ伊邪那美命が陰部を焼かれる神話が考察の対象となる。ほかには、天照大御神あるいはその分身が梭で陰部を突く神話と、倭迹迹姫命が箸で陰部を突くAの伝説とがある。結局、考察の対象は三話である。

火神を産んで陰部が損傷を負う神話の場合、国土・神々を産む伊邪那岐命と伊邪那美命とは夫婦である。ただし、『日本書

紀』の一伝には、両神について「此の二の神は、青橿城根尊の子なり」と説明があり、それに従えば兄妹である。

梭で陰部を突く神話もこれに近く、天照大御神と須佐能男命は姉弟だが、多くの研究者が指摘しているとおり、両神をめぐる神話には男女神による聖婚の性格が濃厚に認められる。[注9] それだけではなく、子が誕生すること、女神が陰部に損傷を負うこと、両神間の拒絶を岩が象徴すること、辺りが暗闇に覆われること、女神をもといた場所に戻そうとすることなど、伊邪那美命と次世代の天照大御神とをめぐる二つの神話では、全体の構造についても箇々の素材についても対応関係が顕著である。

倭迹迹姫命が箸によって陰部に損傷を負う伝説では、その冒頭に「是の後に、倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻と為る」とあって、神と人との夫婦関係が破綻する話であることは自明である。

陰部に損傷を負う内容の三話に共通するのは、男女神がその場で離別し、損傷を負ったために女が絶命する、という点である。三話を、陰部に損傷を負うこともなく女が死ぬこともない「丹塗矢伝説」と比較すれば、陰部に損傷を負うことと、男女神が離別し、損傷を負った女が絶命することとが、密接に結び付いている、という可能性が考えられる。そして、その可能性を支持することがらも提示することができるように思われる。

そのことがらとは、陰部にひどい損傷を負えば、それまで続いていた、男根と女陰とに象徴される男と女との直接的な関係が直ちに破綻する、ということである。

『日本書紀』の国土創成神話の冒頭には、夫婦の会話を含む、

G　因りて陰神に問ひて曰はく、「汝が身に何の成れるところか有る」とのたまふ。対へて曰はく、「吾が身に一の雌の元といふ処有り」とのたまふ。陽神の曰はく、吾が身に亦、雄の元といふ処有り。吾が身の元の処を以て、汝が身の元の処に合はせむと思欲ふ」とのたまふ。是に、陰陽始めて遘合して夫婦となる。

という記述が見える。「雄の元といふ処」「雌の元といふ処」という表現の「元」とは、「根本」「基」などの意である。だから、これらの表現は、言うまでもなく男根・女陰をさす。この神話の語り手は、ごくあたりまえのことだが、男根と女陰とを、男女・夫婦の関係を象徴するものとして把握したと解しうる。

また、『古事記』の神話の冒頭に「次に意富斗能地神、次に妹意富斗乃辨神」という男女の対偶神が登場し、『日本書紀』の対応部分にも同じ対偶神が別表記で登場する。それぞれの神名に含まれる「ぢ」「べ」は男女を表し、両神名に共通して含まれる「と」は、性を象徴する部位つまり男根・女陰を表す、というのが注釈の説明である。男女の対偶神の名に、両性を表す語が含まれていることにも、性的な部位が男女の結び付きの原点だという、あたりまえの把握のしかたが反映している。

このようなことから、陰部に損傷を負ったことで男女が離別するという話の展開は、それまで有効だった陰部の機能が失わ

れることを背景とする、と理解してよいのではないか。それは、男女関係に対する、人々の常識的な発想に基づく展開だろう。陰部に損傷を負った主体が生き続けることなく直ちに絶命するかたちになっているのは、男女関係の破綻を象徴するものだと考えられる。

## 五

以上の論述では、夫である蛇神の姿を人である妻が見たというAの伝説と、目の前にいる蛇神を天皇が見ずに殿中に隠れてしまったというBの伝説とを出発点とし、前者と同様に陰部に損傷を負って女が絶命するという内容の、別の二話にも分析と考察とを加えた。

『古事記』の「次に腹に成れる神の名は、奥山津見神。次に陰に成れる神の名は、闇山津見神。次に…」のように、多くの身体部位に関する記事が列挙され、その一つとして陰部に関する記事が出ている、といった例がいくつかある。こうした例は別として、以上で言及しなかった、陰部にかかわる二つの話について、最後に簡単に言及しておきたい。

その一つは、天宇受女命が裳の紐を陰部に押し垂らしたという神話である。

H　天の石屋戸に槽伏せて踏み轟こし、神懸りして、胸乳をかき出で裳紐を陰に押し垂れき。ここに、高天の原動みて、八百萬の神共に咲ひき。

『古事記』に見える石屋戸神話の記事だが、『日本書紀』の同神話には陰部のことが出ていない。しかし、『日本書紀』では、Hと同じ天鈿女にかかわる記事が天孫降臨神話に見える。天上の道に異様な形相をした猨田彦大神がいるとの報告があり、その事態に対応するためにそこへ派遣された天鈿女が、Hの話に描写されているのと同じような所作を相手の神に見せ、笑って向き立ったという。

I　天鈿女、乃ち其の胸乳を露にかきいでて、裳帯を臍の下に抑れて、咲噱ひて向きて立つ。

こちらの神話にもまた、陰部そのものに関する記事はない。天孫としての邇邇杵尊の降臨を語る段であることに配慮し、「陰」をあえて「臍の下」とした可能性がある。

Hの神話については、滑稽な所作をすることによって笑いを招き、進展のない停滞した事態を打開する、という意味あいが見て取れる。同神話について、ギリシャ神話に登場するバウボが女陰を露出した話と類同的だ、とよく指摘される。娘のペルセポネを冥王であるハデスに奪われたために、ものも言わず食事も摂らなくなったデメテルに対し、バウボが目の前で尻をまくって陰部をさらけ出した。それを見たデメテルは思わず失笑し、そのあとで飲食をするようになったという。

Ｉの神話では、天鈿女が卑猥な所作をして自ら笑ったという話になっている。そのことは、当時の日本人の考えでは、Ｈの神話のように周囲にいる者が笑う必要はなく、その場では誰かの笑いが必要だった、ということを物語る。

この状況では、暗黒の世界を光明の世界に戻し、天上の道を空けて天孫を降臨させなければ、地上の支配は実現しない。にもかかわらず、猨田彦大神が天上の道にいることによって、ひどく緊張した状況が生じている。継続するその緊張状況を解消してくれるのが、緊張とは正反対の心理状況で可能となる笑いだった、ということだろう。

このように考えれば、天鈿女が卑猥な所作をして自ら笑ったという話も、それなりに理解できる。笑いは緊張と正反対の心理状況からうまれるのだ、という人々の日常的な体験に基づく話なのだろう。

言及しておきたい二つめの話は、『播磨国風土記』に見える次の伝説である。

Ｊ　萩原の里　土は中の中なり。右、萩原と名づくる故は、息長帯日売命、韓国より還り上りましし時、御船、此の村に宿りたまひき。一夜の間に、萩一根生ひき。高さ一丈ばかりなり。仍りて萩原と名づく。即ち御井を闢りき。故、針間井といふ。其の処は墾らず。又、墫の水溢れて井と成りき。故、韓の清水と號く。其の水、朝に汲むに、朝に出でず。爾ち酒殿を造りき。故、酒田といふ。舟、傾き乾れき。故、傾田といふ。米春女等が陰を、陪従婚ぎ断ちき。故、陰絶田といふ。仍ち、萩多く栄えき。故、萩原といふ。爾に祭れる神は、少足命にいます。〔揖保郡〕

この伝説には、「米春女等が陰を、陪従婚ぎ断ちき。故、陰絶田といふ」という記述が含まれている。何かの道具が陰部を突いたというのではなく、男との性交によって女が陰部に損傷を負ったという話である。

単なる性交で損傷を負ったとある、その具体的な理由はわからない。また、損傷を負った女たちが死んだとは語られていない。「米春女等が陰を、陪従婚ぎ断ちき。故、陰絶田といふ」という記述の直後に、「仍ち、萩多く栄えき」という記述があるが、二つの記述の内容がどのように関係するのか、話を読んだだけでは不明である。

この伝説のなかには、「一夜の間に、萩一根生ひき」「墫の水溢れて井と成りき」など、息長帯日売命の聖性や霊威を反映する記述が見える。問題の「米春女等が陰を、陪従婚ぎ断ちき」という事件が「仍ち、萩多く栄えき」という事態を導いたのも、息長帯日売命の聖性・霊威によるものだ、と語ったものかも知れない。そうであれば、陰部の損傷が萩の繁茂をもたらしたということになるが、この想定にはどこか釈然としないところがある。

同じ『播磨国風土記』の讃容郡に関する伝説に、「鹿の腹を割いてその血に稲を蒔いたら、一夜で苗が生えた」という記述

が出ている。また、同『風土記』の賀毛郡に関する伝説にも、太水神が「私は宍の血で田を耕作する。だから、河の水は必要ない」と言ったとある。

動物の血と、稲／田と、一夜での苗の成長、といった三要素の結び付きは、「陰絶田」の伝説の内容を想起させる。つまり、稲／田は「陰絶田」の伝説に見える「米春女等」に対応し、動物の血は、彼女らが陰部に損傷を負った時に当然あったはずの出血に対応する。さらに、一夜で苗が成長したことは、「陰絶田」の伝説の前半部に「一夜の間に、萩一根生ひき」とあり、「陰絶田」という地名に続いて「仍ち、萩多く栄えき」とあることに対応する、と考えられる。

「陰絶田」の伝説と動物の血に関する伝説とには動物の血と人間の血との違いはあるが、古い時代に行われていた儀礼の記憶を反映するものであり、神に捧げた犠牲とそれによってもたされた繁茂・豊穣とを象徴的に語るものなのではないか。[注10]

## 注

1　「丹塗矢伝説」に関する私見は、小著『伝承と言語』（一九九五年、ひつじ書房）の第Ⅱ部第四章でやや詳しく述べた。

2　拙著『日本の神話・伝説を読む』（二〇〇七年、岩波新書）の終章で、「箸墓」はもと「恥墓」の意だった可能性があると述べた。妻に禁を破られた大物主神が、そのことに「恥ぢて」人の姿に変身したとあり、また同神の「汝、忍びずして吾に羞せつ。吾、還りて汝に羞せむ」という発言に「羞す（恥見す）」が二度出ていることなどが、そのように想定する根拠である。

また、改めて「倭迹迹日百襲姫命」という名について考えてみると、この名に含まれる「百襲」は、蛇が何度も脱皮をくり返したことを意味するものではないか、と想定できる。「襲」の字には、「重ねて着る」「覆う」「継ぐ」などの意がある。ただし、この名には小異のあるいくつかの別名が存在する。

3　『古事記』『日本書紀』『風土記』などから訓読文を引用する場合は、日本古典文学大系のそれによる。ただし、引用にあたっては、読みやすさを考慮して句読点その他を改めることがある。

4　須佐能男命が櫛名田比売を櫛に変身させ、それを自分の髪に挿したうえで大蛇と闘ったという神話では、髪に櫛を挿したことが男女間の親密な関係を象徴している。

5　蛇の姿で生まれた雷神の子について、「明くれば言とはぬが若く、闇るれば母と語る」（常陸国風土記那賀郡）と記述されていることにも、同じ考えが反映している。

6　Bの伝説に登場する蜾蠃は素手で大蛇を捉えて来たのだから、蛇神を直接に見たはずである。しかし、天皇が「膂力人に過ぎたり」と評する人物であり、実際に大蛇を捉えてくるほどの勇猛な男だったわけだから、特別である。『日本霊異記』に見える類話では、三輪山の神は

最初から最後まで、蛇体の神ではなく雷神として登場する。また、注5にあげた伝説では、蛇体をもって誕生した子と家族の者とが一緒に暮らすのだが、仔蛇だからそれも特別である。

7 『今昔物語集』に見える「箸墓説話」には、神が箸で女の陰部を突いたとある。

8 「垂仁記」には、出雲で肥長比売と一夜の関係をもった本牟智和気があとで彼女の様子をのぞき見ると、それは蛇の姿をしていた、という話がある。正体を見られた肥長比売は執拗に本牟智和気を追いまわしたが、彼は何とか逃げきった。具体的な記述はないが、話にはもともと「見るなのタブー」が含まれていた可能性がある。肥長比売の正体を見た本牟智和気は、結局は死なない。

また、「褶振の峯」をめぐる『肥前国風土記』逸文の伝説では、山にある沼のほとりで女が蛇頭人身の男に出会う。男はすぐに人の姿に変身して、女との別離を惜しむ歌を詠んだ。あとで女の家人が沼に行ってみると、蛇男も女も見当たらなかった。しかし、沼の底に女のものだと思われる「屍」が沈んでいたという。この伝説の場合は、神の姿を見た女が死んだことになる。

上代の文献を広く見渡すと、一口に蛇神とは言ってもそれはさまざまで、直接に見た者が死ぬかどうかは神による、ということがわかる。

9 このことは多くの研究者が述べていることだが、神話全体の構造的な対応については、大林太良『日本神話の構造』〔一九七五年、弘文社〕に詳細な論がある。

10 動物の血に関する二つの伝説が、古い時代の犠牲を反映するものである可能性は、益田勝美「日本神話における外在と内在」〔『国文学 解釈と鑑賞』一九七七年十月〕に示唆されている。しかし、この論では、「陰絶田」の伝説に関してまったく言及されていない。